

【 論 文 】

神様への贈り物

— 日本聖公会の教会刺繍 —

笠 井 みぎわ

はじめに

本稿は、信徒の女性たちによって制作されている日本聖公会の教会刺繍を事例に、手仕事としての教会刺繍の位置づけを民族誌的に捉える。

研究の方法は、文献研究とフィールドワークを中心におこなった。フィールドワークは、2013年の9月～2014年の10月にかけて京都、大阪、東京、神奈川の4都府県に位置する12のキリスト教関連施設での参与観察、インタビュー、資料渉猟による計40回のフィールドワーク調査を行った。その中でも、各宗教施設に属している3つの「刺繍の会」での参与観察を京都府のM教会で10回、東京のN修女会に属するC会で3回、神奈川県の本教会で2回というように集中して行った。なお、本論文では、インフォーマントの個人情報に関わることもあるため、事例にあげる人物の名前には原則として仮名を用いる。

筆者が日本聖公会の教会刺繍を本論文の題材に取り上げたのは、第一に教会刺繍の制作そのものが一般の女性信徒の信仰実践の行為として行なわれていること、第二に完成した刺繍作品が司祭の祝福を受け、聖なるものとして扱われ、宗教的な価値を持つこと、第三に教会刺繍の制作技法やデザインなどが極力外部に流出しないように制作されていることに興味をおぼえたためである。

聖公会と同じ西方教会に属すカトリックでは、教会内の装飾品や祭服に施される教会刺繍の制作は、現在修女とそれ以外の専門業者がその制作の大部分を行なっている。そのため一般の信徒が教会刺繍の制作を行なうということはあまりない。従って、信徒自身が教会刺繍の制作を行なうの

は聖公会の特徴であると言えるだろう。聖公会で信徒による教会刺繍の制作が始められたのは、それまで教会刺繍の制作に携わってきた修女が減少し始めた 1970 年以降のことといわれる。それから今日まで、聖公会内では女性信徒たちがグループを形成し、各々で確立した信仰の規定にそって制作を続けてきた。

しかしその聖公会において、現在、教会刺繍の作り手の後継者不足問題が浮上している。要因として考えられるのは、近年聖公会の信徒減少が影響しているためである。後継者不足の課題を抱えているにも拘らず、信徒たちは教会刺繍の情報を極力教会の外に流出しないようにしている。従って、教会刺繍の制作に新規に加わる参加者は、たとえ聖公会の信徒であったとしても人づてに教会刺繍制作の情報を入手して参加している。こういった情報の遮断は後の世代に教会刺繍を継承させることを難しくさせているが、信徒の女性たちはあくまでこの状態を維持し続けている。筆者はこの閉鎖的な行為を、本稿において「見せない行為」と呼ぶことにする。後継者不足の打開策として、現在少人数ではあるものの比較的若い世代の信徒から教会刺繍の公開にふみきり、後継者養成を促進すべきではないかとの意見がでている。しかし、多くの信徒が教会刺繍の公開には依然として慎重なままで、後継者不足の打開策は具体的に進められていないため現在の教会刺繍は岐路に立たされている。

手芸及び刺繍についての研究は主に服飾史の分野で行われてきたが、近年、近代史や女性史の観点から研究が進められている [中川, 田中 2013]、[松原 2013]。教会刺繍の担い手が女性ばかりなのは、刺繍を含む手芸が女性の歴史と密接に絡み合っているからである。近代における女性の創造に刺繍が果たした役割については、ロジカ・パーカーによって詳細に論じられている [PARKER1986]。山崎は今まで社会学研究の分野では着目されてこなかった手芸分野の考察を通して、日本の帝国主義の創出を背景に女子教育と手芸教育が結びつき、近代の女性像がいかに構築されていったかを論じている [山崎 2005]。一方、中川・田中は明治政府による外貨獲得政策の一つとして女子への刺繍教育が導入されたことに着目し、刺繍を産業分野の一つとして捉え、刺繍教育が明治以降の近代化を押

し進める役割を担っていたと論じている。松原は明治時代に職人達が高度な技術を磨くことによって、明治から大正にかけて日本刺繍が「刺繍絵画」という分野を開拓し、海外から潤沢な資金を得る外貨獲得産業として発展したこと、そして近代的な手芸教育が大正時代以降新しい美術分野の創出にもつながったことを明らかにした。

本論で取り上げる教会刺繍もまた、日本では女性によってその技術が習得され継承されてきた。しかし、教会刺繍は日本ではまだ研究の対象になっていないばかりか、その存在自体もあまり知られていない。キリスト教信者間でも宗派が異なれば教会刺繍の存在を知らない場合も多くみられる。また、日本における教会刺繍の歴史の変遷を考察すると、明治期だけでなく昭和初期から後期にかけても刺繍が外貨獲得の一助になっていたという事実が浮かび上がる。

そこで本稿では、日本聖公会の教会刺繍の制作工程にも着目し、そこに用いられている日本刺繍の技法、その制作と販売に関する信徒の行為が信仰とどのように結びつけられているのかを明らかにし、信仰表象として制作されてきた教会刺繍が現代社会における消費の中に組み込まれていくこれからの可能性についても考察することとする。

第Ⅰ章 日本聖公会の教会刺繍の成立

1. 聖公会の日本伝道

聖公会¹は、カンタベリー大主教を精神的指導者とするイングランド国教会から生れたキリスト教の教派の一つである〔小池 1999:27〕。世界160ヵ国に広がる34の管区と、4つの自治区が教義を共有し、それぞれが自治権を有している。全世界での聖公会信徒の総数は約7,000万人である〔日本聖公会管区事務所 HP, Pew Research Center's Religion & Public Life Project〕。

日本における聖公会の知名度はカトリック、プロテスタントと比較すると低い。日本国内のキリスト教信者数約203万人の内プロテスタント信者数が約97万人と大多数を占め、カトリック信者数は約43万人である。プ

ロテスタントとカトリックという二大教派と比較すると、日本聖公会の信徒数は約5万4,000人（全て2010年現在の統計による）と最も少数ではあるが、300以上の教会を有している〔日本聖公会管区事務所 HP〕。

聖公会の日本伝道は、明治初年の1868年に米国聖公会が始めである。1873年にSPG（Society for the Propagation of the Gospel 英国聖公会福音宣布教会）がエンソル（George Ensor）を、CMS（Church Missionary society 英国聖公会宣教協会）¹がライト（W.B.Wright）およびショウ（C.Shaw）を派遣し、この二伝道協会の日本伝道が開始された。さらに1886年には第二代日本主教E. ビカステス（Edward Bikkersteth）が派遣され、日本聖公会の組織編成に当たった。主教は当時米国聖公会伝道局と英国の二伝道協会が行っていた伝道活動の統一を主導し、1887年2月、日本聖公会の組織成立を実現させた〔小池 1999:27, 日本基督教協議会文書事業部キリスト教大事典編集委員会 1988:97,609-610〕。

2. 聖公会の祭服

現在の聖公会の祭服はローマ・カトリック教会の伝統をほぼ踏襲している〔吉田 n.d.1〕。日本聖公会では祭服に関する規定は存在せず、個人的な趣味・嗜好のもとに判断されて着用されている〔吉田 n.d.3〕。祭服の形は明治期に日本に伝道した米国聖公会や英国聖公会の伝統に基づいている〔吉田 n.d.1〕。以下にその概略を述べる。

（1）祭服の種類

祭服には大きく分けて通常服と聖餐式以外の礼拝用の祭服、聖餐式用の祭服がある。ここでは紙幅の都合上祭服の全てについて述べることができないので、調査地の「刺繍の会」で最も多く制作されていたストールについて見てみよう。

ストール（stole（英）、ストラ stola（羅））とは、聖公会やカトリックで着用される聖餐式用の祭服の一つであり幅7cm～12cm、長さ約240cmの帯状の絹織物である〔吉田 n.d.6〕。中央と両端に十字架等の刺繍が施されている。主教・司祭・執事が祭服を着用してサクラメント諸式を執行し

参列する際ストールをアルブまたはサープリスと呼ばれる祭服の上に、執事の場合は左肩からたすき掛けにし、主教と司祭は首からかけて着用する。ストールは当初ハンカチーフほどの大きさだったものが、次第に大きくなったようである。不死を示し、キリストの軛を意味している。4世紀東方教会で使用され、後に西方教会が助祭の衣服として取り入れた。現在はカトリックでは助祭以上、聖公会では執事以上の聖職者が着用している〔濱崎 1998:179, 吉田 n.d.6〕。

聖公会でもカトリックと同様に期節によって祭色の使い分けがある。聖公会の教会暦と祭色は、降誕日第一主日を基点とする教会暦に沿って、祭服の着用規定に取り入れられている。聖公会は、『第1 祈祷書』作成時に、中世カトリック教会では複雑だった教会暦を整理し、聖人の日を聖書的根拠のあるものに関連付けて整理した。6世紀には教会暦の基本形が完成したようで、それは移動祝日（temporale）と固定祝日（sanctorale）を基礎とし、前者は復活日を、後者は降誕日と固定された聖徒の祝日をもとに形成されたと言われている〔吉田 n.d.6〕。

（2）祭色の意味

祭服の色を祭色というが、この祭色は暦によって指定されている。基本は4色で白、紫、赤、緑である〔小池 1999:83, 吉田 n.d.8〕。祭色の意味については以下の通りである。

- ①白：光、勝利、喜び、純潔。殉教者でない聖徒の祝日、入信の式、聖婚式、葬送式などに用いられる。
- ②紫：悔い改め、慎みを表し、降臨節、大斎節に用いられる。
- ③赤：火、血を表し、聖霊降臨日、聖週、殉教者の祝日等に用いられる。
- ④緑：平和、希望、成長を表し、顕現節、聖霊降臨後の節に用いられる〔小池 1999:83, 吉田 n.d.8〕。

3. 修女の教会刺繍

正確な年代はすでに資料が紛失しているので不明だが、1970年～1980年代頃までは日本聖公会で制作されていた教会刺繍の大部分は、東京三鷹のN修女会の修女たちによって行なわれていた。しかし現在筆者が認知

している限りでは、N 修女会で行われていた刺繍技法を伝えているのは後に取り上げる N 修女会の静香修女 (80 代) と滋賀県在住の静山さん (80 代) のみである。N 修女会の初代霊母だった日向子修女 (2014 年現在 107 歳) が香蘭女学校の刺繍部出身であったことから、N 修女会は教会刺繍を制作販売することによって自立した。従って、現在日本聖公会で制作されている教会刺繍は香蘭女学校の刺繍教育が基盤になっているといえよう。

すでに亡くなられている B 教会の山堀明美さん (生没年不明) がどのように教会刺繍の技法を獲得したのかはわかっていない。この技法は M 教会と C 会によって継承されている。C 会が属す N 修女会に教会刺繍の技術がいかに伝承されたのかについて以下に見てみよう。

ビカステス主教が日本で聖公会伝道を開始した当時、貧しい家庭の女兒や孤児となった女兒たちが遊女の職に追い込まれる事態が多発していた。香蘭女学校的女子教育はそのような女兒たちの境遇を憂慮し、日本女性固有の徳をキリスト教精神によってさらに昇華することへの急務を痛感したビカステス主教によって始められ、後にヒルダ・ミッションの社会福祉事業の 1 つとなった。主教は、1887 年、初代校長の今井寿道に香蘭女学校設置願いを出願させ、同年 11 月これが許可された。翌 1888 年 3 月東京府麻布永坂一番地にあった島津忠亮子爵邸の一部を借り受け、校舎が落成した。女学校は 4 月に開校し、生徒 7 名を迎えた。その後予科を設置し、香蘭女子小学校を付設、さらに神学部・手芸部も付設した [香蘭女学校 HP]。

主教は組織統合と同時に、自ら男性編成による宣教団体聖アンデレ・ミッションと、女性編成による聖ヒルダ・ミッションを創設した。聖ヒルダ・ミッションの事業は 1892 年当時の濃尾震災直後に始まった。ミッションの主な目的は教育、看護、伝道者養成とされており、具体的には以下の 6 事業であった [中西 2011:15]。

- ①日本人女性に対するミッション教役者としての訓練
- ②牛込・京橋地区の女性や子どもたちへの伝道およびその他の事業
- ③6 歳以上の少女のための女学校
- ④英国式の刺繍学校

⑤少女のための小規模な孤児院

⑥医療事業 [中西 2011:15]

ビカステス主教と同様に、児童教育の重要性を感じた宣教団の一員はとくに女兒の自立支援の必要性に着眼し、女子教育や廃娼運動に力を注いだ。学校や病院、救済施設など多額の費用を伴う事業を財政的に支えたのは、ビカステス主教が来日前の 1885 年に結成した聖パウロ・ギルドの年会費や会員によって集められた献金であった [中西 2011:15]。

香蘭女学校は 1910 年には予科を廃止し、高等科を設置した。生徒数は 100 名にまで達していた。しかし同年、失火による火災を受け、1912 年に芝区白金三光町 360 番地に移転し現在に至る [中西 2011:15, 2012:24, 香蘭女学校 HP]。

第Ⅱ章 日本聖公会の教会刺繍の制作

1. 信徒の教会刺繍

アメリカやイギリスでは聖公会の祭服の制作技法についての指南書が出版されている。信徒がその制作に関わることが多いため、デザインや地布にはそれぞれ国ごとにオリジナリティがある。従って、日本の祭服には日本の伝統工芸である日本の織物が用いられ、そこに施される教会刺繍には日本刺繍の技法が用いられている。しかし、M 教会の「刺繍の会」で教会刺繍の制作に携わる女性信徒たちは、教会刺繍を日本刺繍と表現することに抵抗を示し、「これは教会刺繍である」と常に主張する。

では、信徒の述べる教会刺繍と日本刺繍の異なる点とはなんだろうか。ここではまず日本刺繍と教会刺繍との比較をする上で、仏教の信仰表象として制作されていた繡仏について見てみよう。

現代では仏像は自由に拝観できるが、インドで紀元前 5 世紀に仏教が起ってから初期の数世紀は、信仰に際して仏陀の姿を彫刻として表すことは、「仏の偉徳を冒瀆する」行いだとして禁じられていた。しかし、民衆は仏の姿に憧憬をつのらせより顕在化したかたちで仏との出会いを求めたため、紀元後 1 世紀には人間の姿で表される釈迦牟尼像（仏像）が誕生し

た。その後、仏像は嵌形彫出され、壁面や紙、布などに描かれた。この流れの中、アジア各地に仏教の教義とともに流布・伝播した裂地に糸で縫い取りをして制作された仏像が繡仏である〔青木 1992:10-11〕。繡仏は主に礼拝の対象としての彫像や信仰の対象として最も尊重されている本尊と比較すると、壁懸けのように堂内に厳かに飾るものであったという特徴がある〔奈良国立博物館監修 1964:4〕。従って、堂内を装飾するものとして使用されている点は礼拝堂を装飾する教会刺繍の用途との共通点としてあげられるだろう。しかし相違点としては、教会刺繍は教会内を装飾する用途の他、礼拝の際の聖卓覆いや聖杯覆い、また司祭や執事が身につける祭服としての用途の面もあるため、制作する上で個人の顔に似合うモチーフや色を考慮する必要性と共に、実用面での収納管理についても考慮する必要がある。

以上の点を整理すると、繡仏と教会刺繍との最も大きな違いは、教会刺繍が生身の人間が着用し使用するものであるのに対して、繡仏は信仰の対象として制作されるため絵画的な要素が強いということがいえる。

それでは次に、日本刺繍との違いに着目しながら教会刺繍の特徴について見ていこう。筆者が調査のために最も足を運んだのが京都の M 教会の「刺繍の会」である。ここでは、M 教会の教会刺繍の制作工程について見ていこう。

2. 教会刺繍の特徴

M 教会では制作する際に地布と刺繍糸の色の組み合わせ、デザインなどに関しては必ず指南役の静山さんや吉原さん（70 代）に相談する必要がある。教会刺繍とは自分が制作したいものを思いのまま制作するものではない。オルター・ギルド（Altar guild）での規定に即し判断されているのである。オルター・ギルドとは、礼拝ごとに聖餐式の準備、後片付け、式服や礼拝用具の管理などを行い聖職を助ける目的で勤めを果たす奉仕団体で、聖器、聖布がいつも清潔に保たれ、整っているように心を配ることによって教会の働きに参与する。その働きはいずれも司祭の指示に従って行われるものであり、聖公会及びカトリックのクリスチャンにとっては礼

拝を行う上で欠かすことのできない団体である。この団体に求められることは、神を愛し、神から授かった特別の賜物と使命を自覚して奉仕することであり、その中心をなすものが祈りであることを忘れてはならないと考えられている〔桑山 2002:58〕。趣味やアート作品で制作する手芸作品及び日本刺繍と教会刺繍との決定的な違いは、教会刺繍が自己表現を盛り込む作品ではないということにある。

アイコン制作もまた同様に主題が決められていて、勝手に自分の好むものを描くことは許されない。主題だけでなく構図も色彩も決められている。こうした規定は「神に近づく一筋の道」が創作者である画僧の心のなかで見つけ出されていくことであり、自由自在に描いて神への道を見つけて出すのではなく、制約のきびしさに忠実であるという拘束された気持によって初めて本来的な道が見えてくるのである〔松永 1981:20〕。

以上のことから、教会刺繍の制作には極めてアイコン的な要素があるといえよう。信徒が教会刺繍を日本刺繍と表現することに抵抗を示し、「これは教会刺繍である」と常に主張する理由はこうした教会刺繍の特徴にあると考えられる。

第三章 教会刺繍の制作

1. 図案を決める

地布の色や使用する糸の色を念頭に入れ、個々の教会の雰囲気との調和をイメージしながら何度も構想を練りなおす。制作工程のうち最も多くの時間を要する作業である。アルミー社が発行する雑誌からデザインの発想を得たり、以前行った作品の図案をもう一度採用しそこに多少の改変を加える場合もある。アルミー社が発行する雑誌にはキリストを表す IHS の文字や羊、聖霊を表す鳩などのデザインが掲載されており、制作者は各自で気に入った図案を選択し、図案同士を組あわせながらデザインを完成させる。また、どの図案が現在自分の行っているものに最も適する図案であるのかについても注意を払う。例えばストールの場合は着用する聖職者の信条と一致しているのか、またそのデザインは着用者に似合うのか、聖卓覆いや献金袋を制作する場合は現在教会内で不足している期節の色を確

認し、その期節に適しているデザインを考える2。ここまでの作業でようやく半分ほどの作業が終わる。

2. 材料の購入

「刺繍の会」で用いられる道具や材料は、そのほとんどが日本刺繍で用いられるものと同じものである。そのため材料経費は制作するものによって異なるが、祭服や献金袋の制作に本絹、金糸、銀糸を用いる場合は少なくとも完成品には2万円～5万円ほどの費用がかかる。通常刺繍制作に用いられる材料の購入費は、個人負担ではなく、教会側に材料費を申請するが多い。

制作に必要な材料は指定された店で入手する。教会内の装飾や祭服用の布には京都西陣の祭服専門店「みこころ」の布が主に使用されている。刺繍の会では家にあって使用していない着物用の反物を持参して、祭服の地布に応用できるか相談する信徒もいる。その場合は指南役の吉原さん（70代）が布の色や地布に施されているデザインを検分し、使えそうなら教会の収蔵庫に保管する。

刺繍糸を購入する際に筆者が信徒に紹介された店は丸太町通にあり、外観は看板もかけていない普通の民家であった。客の注文にきめ細やかな対応ができなくなってしまうという店主の懸念からインターネットにも載っていない店で、140年の歴史を持つ日本刺繍糸の専門店である。現在京都には昔ながらの日本刺繍を専門にしている糸屋はこの店を除いて残っていない。

3. 刺繍の制作

教会刺繍には司祭や執事の祭服を装飾する目的で制作されるものと、礼拝の際に用いられる聖杯を拭う麻布に絹糸で装飾を施されるものがある。英語では前者は church embroidery, ecclesiastical embroidery といい、後者は church linen という。ただし筆者が調査を行った日本聖公会ではどちらも教会刺繍という。ここでは日本刺繍の技法との比較分析を行うため、日本刺繍の技法を用いて制作されている祭服や聖卓に施される教会刺繍の

制作過程を見ることにする。

まず日本刺繍と教会刺繍の共通点は、両手で針を持ち刺繍を刺すことである。使う針は一本だが左手で針を持ち、布の下から上へ刺して右手で受け取る。右手で針を持ち上から下へ刺して左手で受け取るという方法によって、必ず両の手は布から出てくる針を待ち構えていなければならない。このような制作方法は日本刺繍も教会刺繍も同じである。

しかし、教会刺繍を制作する上で意識すべきこととして、刺繍の会の創設者である静山さんが何度も述べていることは、まず教会刺繍は日本刺繍ではないことを認識した上で制作の違いを頭にしっかりと留め置くということであった。信徒達が認識する違いを以下に見て行こう。

制作する上での注意点として静山さんが何度も述べていることは、決定した図案を紙に転写する際に必ず中心をとること。ここで中心をとるということは、横に引いた一つの線に十字架のように垂直に縦の線を交わらせ図案を転写しなければならないという意味である。教会刺繍で最も大切なことは、図案が歪んでいないことである。また、必ず左右対象になるように気を配ることである。それさえ守れば誰もが練習すれば制作できるものであるため、完成した教会刺繍の出来上がりはいびつでも構わないし、完成するまでにどれだけ時間がかかってもいいのである。

次に制作技法についてだが、教会刺繍の技法には日本刺繍の技法をそのまま用いている部分と、そうではない部分が混在している。教会刺繍の技法には立体性を持たせる肉入れと呼ばれる日本刺繍の技法が取り入れられており、この点が信徒たちが教会刺繍と日本刺繍との違いとして認識しているところである。教会刺繍は立体性があることによってより教会刺繍然とするため、肉入れは大変重要である。教会刺繍で用いられる肉入れの技法は、着物や小物類に施される肉入れとは異なり、懸想品に施されるほどの厚みを必要とする。その理由は、信徒たちが完成品として想定しているのは欧米のメタル糸を用いて制作される教会刺繍だからである。日本ではメタル糸があまり使用されないこともあって、日本の金糸のみで教会刺繍に厚みをもたせるために従来の技法に改良が加えられている。通常着物などに施される日本刺繍の場合5掛以上の金糸の使用頻度は少ないが、教会

刺繍では12掛の金糸を頻繁に使用している。日本の金糸は欧米の金糸と比較して品質は高いが、その分大変細く取り扱いには注意が必要だということもあり、信徒たちの間でも最も難しい技法の1つとして肉入れは認識されている。

以上のことから、図案を転写する際に中心をとるということ、左右対称でなくてはならないこと、刺繍に厚みを持たせる技法を取り入れることが、信徒が認識する教会刺繍と日本刺繍との相違点としてあげられる。

刺繍の制作工程は以下のとおりである。

- ①図案を転写する。この際、最も重要なことは図案の中心をとることである。
- ②糸の色を決める3)と4)は順不同になる場合もある。最終的に糸の色を決定する。
- ③布を刺繍台にはる。
- ④刺繍糸に撚りをかけ、刺繍を刺す。

これだけの費用や手間がかかるにも拘らず、「教会のためにできることがあるなら」と個人で糸や布を購入する信徒も少なくない。信徒たちが教会で用いるものの品質にこだわる背景には、良い品質のものはそれだけ長持ちし、儀礼に用いる際はもちろんのこと、後の保管管理にかかる手間が減るということがある。

第Ⅳ章 刺繍の会の活動事例

現在筆者が認知している限りでは、N修女会で行われていた刺繍技法を伝えているのは後で取り上げるN修女会の静香修女(80代)と滋賀県在住の静山さん(80代)のみである。先に述べように、すでに亡くなられているB教会の山堀明美さん(生没年不明)がどのように教会刺繍の技法を獲得したのかはわかっていない。

本章では、京都のM教会、東京のN修女会に属すC会、横浜のB教会の3つの刺繍の会の活動を見ていくことにしよう。

1.M教会の刺繍の会

日本聖公会は全国 11 教区で編成されており、京都教区は京都府、大阪府の一部、奈良県、和歌山県、三重県、滋賀県、福井県、石川県、富山県の 9 府県にまたがっている。京都教区には日本聖公会の中で最も多い 42 の教会があり、信徒数は約 3000 人である [京都府伏見区 HP]。

筆者が調査を行なった M 教会「刺繍の会」は京都府京都市伏見区にある。伏見区は京都市の南東部に位置し、1931 年に伏見市、深草町、醍醐村など 9 市町村と京都市との合併・編入によって誕生した。京都市内では最大の約 28 万 3 千人の人口を擁する行政区である。区内には桂川や宇治川など主要な河川が流れ、古くから伏見港などを中心に水運の拠点として発展してきた。良質な地下水が豊富なためこの地下水を活かして酒造業が発達し、全国有数の生産量を誇る伏見の代表的産業となっている [京都府伏見区 HP]。

M 教会の信徒数は 159 名で、毎日曜日の礼拝参加者数は平均して 30～40 名ほどである [日本聖公会公式サイト HP, 日本聖公会京都教区 HP, M 教会資料 (2013 年 11 月現在)]。M 教会「刺繍の会」は静山素子さん（仮称:80 代）を中心メンバーとして創設された教会刺繍制作を行なう団体である。静山さんは静香修女と共に教会刺繍を学び、2000 年に日本聖公会の京都教区、大阪教区の「刺繍の会」を創設した女性である。M 教会「刺繍の会」も C 会と同じく「刺繍の会」の発足自体は 2000 年だが、教会刺繍の制作に関してはそれ以前から団体を立ち上げずに小さなグループを編成したり、個人で行なうなどの取り組みは行なわれてきた。静山さんは元々聖公会の信徒だったが、金沢さんに師事したことで初めて教会刺繍の制作に足を踏み入れることになった。

M 教会の「刺繍の会」のメンバーは総勢 20 名ほどで、女性ばかりである。高齢や多忙のため参加できないメンバーもいるため実際の参加者は 10～12 名ほどで、年齢層は 80 代が 2 名、60～70 代が 3～4 名、50 代が 2～3 名、40 代が 3 名、20～30 代が 1 名である。刺繍の会の活動は、毎月第一月曜日 10:30～15:00 まで行われている。この活動は営利目的ではなく、あくまで教会の祭壇奉仕会で用いる聖品を制作するために行なわれている。「刺繍の会」のメンバー全員が M 教会の信徒というわけではなく、京都教区

に属する他の教会の信徒も参加している。その内 M 教会からの参加信徒は 2 名である。「刺繍の会」への参加には通常どのような資格も必要としない上に、男女の区別もない。刺繍職人としての特殊な技能も必要ない。またクリスチャンではない筆者の参加が可能であったことから、クリスチャンや聖公会の信徒でなくてはならないという規定も存在しない。しかし、教会刺繍の制作技法に関しては明確な規定がある。現在 M 教会「刺繍の会」で行われている刺繍制作の技法、及びデザインに関する留意点は、前節で述べた金沢さん指導のもと教授された内容がもとになっている。

2.N 修女会の刺繍の会

N 修女会に属する刺繍の会である C 会の現在のメンバーは 3 名で、全員 60 代以上である。3 名の信徒たちはそれぞれ東京都内の異なる教会に所属している聖公会信徒である。この会でもまた、「教会のためにできることがあるなら」という志のもと集まった信徒たちが教会刺繍の制作を行っている。C 会の発足は 2003 年に入ってからだが、自身の教区の「刺繍の会」で教会刺繍の制作を以前から行っていた信徒もいる。教会刺繍の技術に関しては、もちろん指南役の信徒の指示を受けるが、いずれもの信徒が教会刺繍の制作技術を向上させるために日本刺繍を自発的に習いに行くなどの工夫をしている。

発足時は今よりもメンバーがいたが、高齢のため続けることが困難になった信徒は現在 C 会には属していない。毎週木曜日の午前 10 時から終日教会刺繍の制作を行っている。ここでの教会刺繍の制作が信徒たちの収入源になることはない。メンバーが教会刺繍を制作する際は、かつてナザレの刺繍部に所属していた静香修女（80 代）に助言を求めることもある。C 会では全国の聖公会の教会から教会刺繍の受注を受けて制作するため、教会刺繍の制作は自身の信仰と時間をかけて向き合う場ではなく、どちらかと言えば労働であるとメンバーの女性たちは述べていた。そのため、M 教会の「どれだけ時間をかけてもいい」や「いびつでも良い」といった意識はない。次に B 教会の刺繍の会について見てみよう。

3.B 教会の刺繍の会

B教会は、横浜教区に属す教会である。筆者はここで2014年6月と2014年9月に聞き取りと資料渉猟による調査を行なった。B教会の刺繍の会の構成メンバーは、東京教区、横浜教区に属す総勢10～15名ほどの女性信徒である。毎月第一水曜日に刺繍の会が行われる。最年少のメンバーは50代が1名で、それ以外のメンバーは60代が2～3名、70代以上が6～7名、80代2名であった。6月、9月ともに13～15名ほどのメンバーが参加していた。M教会と同じように、B教会にも他の教会や東京からの参加者があった。ここでもまた、人づてに情報を集めてB教会の「刺繍の会」にたどり着いたという信徒が4名いた。

この刺繍の会の創設者は、山堀明美さん（仮称：生没年代不明）という女性であったが、現在はすでに亡くなっている。現在の「刺繍の会」の指南役は貞光陽子さん（仮称：80代）という女性である。貞光さんは1965年頃から山堀さん指導のもと教会刺繍の制作を行なうことになった。その当時B教会は創設されてまだ間もなく教会装飾品が不足していたため、自分たちで作ろうという山堀さんの呼びかけのもと教会刺繍の制作が始められた。B教会でもM教会と同じく、最初はピューリフィケイターから制作し、きれの張り方、針の持ち方を中心に指導が行なわれた。練習用の木綿の布に刺繍をするところから始め、1年以上基礎の段階を踏んだ段階で、貞光さんはもうこれでやめようと思っていた。しかし、山堀さんに次に献金袋を制作するよう指示され、その次にはストールの制作が指示された。ストールは1年をかけて制作した。そのうちに制作の中心メンバーになっていった。

B教会も、M教会の例と同じく、基礎の工程をすべて終えなければ次の技法の指導が行なわれない。そのため指導者が高齢の場合、その技術を完全に習得する前に指導者が亡くなる例もある。こういった聖公会の刺繍の会における技術継承法では、後継者を育成する際に困難な状態に陥ることがある。

貞光さんの場合も山堀さんが亡くなってから、教会刺繍に厚みを持たせるためにどうすればよいのかわからないという課題にぶつかった。日本刺

繡の材料を使用して教会刺繍に厚みを出すために、貞光さんは試行錯誤の過程で足柄刺繍という厚みがある日本刺繍を発見した。その刺繍の技法を習得するために、足柄刺繍の唯一の職人である上田菊明氏（80代）の工房に1980年代に一時期弟子入りし、厚みの出し方を習得した。足柄刺繍の技法を融合させた貞光さんの取り組みは、M教会、C会で行なわれている刺繍技法には見られない技法である。3つの刺繍の会にはそれぞれ独自の教会刺繍が確立されているのである。

B教会の教会刺繍の特徴は、C会 M教会と比較すると、装飾性やデザイン性を盛り込んだ教会刺繍にある。例えば、M教会の教会刺繍には、通常、慎みの時期である降臨節、大斎節に用いられる紫の祭服や教会装飾品には銀糸を用いて落ち着きを持たせるよう配慮されているが、B教会では大斎節の紫の期節の祭服にも金糸がふんだんに用いられている。他にもB教会で制作されている教会刺繍は、司祭や執事からデザインや色の組み合わせに関する希望を詳細に聞き制作しているなど、M教会の例とはまた異なる特徴が見られた。しかし、どちらが正しいということはない。それが聖公会を特徴づけるおおらかさである。

第V章 教会刺繍

1. 刺繍の公開をめぐる意識の対立

前章ではM教会、B教会、並びにC会の3つの事例を見てきた。先に述べたように、教会刺繍を始めたN修女会刺繍部は本来女性の自立支援を目的に設立された。したがって、販路を拡大するためのデザインの工夫や与えられた期間内に依頼されたものを制作することは必須条件であった。N修女会の刺繍は、信仰と祈りの行為とともに貨幣を受け取るための労働だったのである。しかし、調査を行ったM教会、B教会、並びにC会での刺繍制作には、儲けをえるためにデザインを重視する傾向は見られなかった。従って、その制作はかつてのN修女会の自立の目的からはされている。唯一、C会に関しては受注を受けて制作を行なっているため、期間内に注文を受けた品物を早急に仕上げなければならないという面はある。しかし、C会を構成するメンバーも制作に従事しているのは家庭を持

つ女性信徒ばかりで、教会刺繍の制作を自身の収入を得るために行っているわけではないことは共通している。この会に参加するためには、教会刺繍を労働以外の目的をもって行なえる生活基盤を持っている必要がある。そのため M 教会、B 教会、並びに C 会の現在の刺繍の会のメンバーの大多数は、現在就労する必要性のない 60 代以上の専業主婦なのである。後継者不足はいずれの 3 つの「刺繍の会」でも深刻な課題ではあるものの、概してどの会でも教会刺繍の知名度を広げるために、具体的な解決策への動きは見られなかった。

しかし近年、後継者不足の打開策として、ごく少数ではあるが、40 代、(M 教会 1 名) 及び 50 代 (B 教会 1 名) の信徒からインターネットで教会刺繍を公開する案がだされている。この新しい案を実施することについては慎重な意見が多く、B 教会を除いて、否定的な意見がある。その理由としては「公開する理由がない」「信徒以外の人が教会刺繍を制作しても意味がない」といったものだった。B 教会の最年少の 50 代の信徒は、「今後の技術継承への不安があるため、公開は確かに考えている」と述べていた。また、「自分より下の世代が今のところはいないのが不安ではあるが、公開するにしても慎重に考える必要がある。現在インターネットと教会の関係は岐路に立たされている」と思うと述べていた。

これに対して B 教会の 60 代の信徒たちの意見は、C 会と M 教会の例とは異なり、「信徒がそれで増えるなら構わない」「どちらでもいい」といった意見が聞かれたが、他方で「公開に反対する信徒の気持ちもわかる」という意見も出た。70 代以上の信徒の意見としては、「自分の制作した教会刺繍をみせることなど、考えたことがない」といった意見や、「よくわからない」といった意見が出たものの、否定的な意見はでなかった。以上のことから、B 教会の「刺繍の会」では、C 会、M 会で見られたような否定的な意見は出なかったものの、インターネットでの教会刺繍の公開については慎重な意見が目立った。

2. 教会刺繍とアートとしての刺繍

M 教会で趣味の刺繍と教会刺繍との違いについて信徒に質問を行なっ

た時の様子を述べよう。以前、刺繍の会に参加していた人で刺繍がとても上手な人がいたが、その人は自分の好きなように制作したいという気持ちが強く、できあがったストールを写真にとって、みんなに配ったということがあった。「それは自分たちの信仰とはかけ離れたものであると感じた」という内容を信徒の一人（40代）が述べていた。後継者不足に悩んでいたとしても、刺繍の会に属すメンバーには同じ志を持つ人を求めているとともに、自分たちの信仰と異なる目的を持つことが教会刺繍の制作に共に関わることを最も難しくしているという思いがあるのだろう。

趣味として行う刺繍であれば、自分の思うまま自由に創作し、ソーシャルネットワークを用いて発表するのにも問題がない。あるいは「売る」ということを仮定すれば、売るために装飾を変化させたり、刺繍糸も各々の好きなようにアレンジすることが可能である。そして「見せる」あるいは「売る」という目的のためには、装飾をいかに美しくするかということは大変重要な要素である。しかし、現在の刺繍の会の多くのメンバーにとって教会刺繍はそういったものとは一線を画すものである。静山さんが「どれだけ時間がかかってもいい」とか「いびつでもいい」と繰り返し述べていたことを振り返ると、M教会の教会刺繍が時間を管理され、生産されるものとはおよそかけ離れたものだということが理解できる。

教会刺繍は中世及び19世紀のアーツ・アンド・クラフツの勃興期には、販路拡大のためにデザインを重視して制作されていた[SCHOESER 1988]。従って、当初の教会刺繍では販売するためにデザイン性を重視することは問題がなかった。しかし、現在日本聖公会で教会刺繍の制作を行っている信徒の女性たちは、あくまで販売することを目的とせず、時間を短縮し正確に制作することが可能なミシンでの制作をできるだけ行わないようにしている。信徒の女性たちがあくまで手で制作することを重視しているのは、手を用いることが信仰と向き合うという意味を持っているからなのである。それについては、後に詳しく述べることとする。

以上に考察してきたように、現在の日本聖公会のM教会の「刺繍の会」ではあえて美しさを追求しないところに教会刺繍の神髄があるという意識がある。教会刺繍の規定には明文化されていないが、筆者の調査から、

M教会の教会刺繍には「売らない」「見せない」「美しさを求めない」という規律があることがわかった。教会刺繍の制作は、アート作品の手芸と本質的に異なる、個人の信仰心に基づいた手仕事による「神様への贈り物」なのである。

3. 教会刺繍の「手仕事」意識の変化

本章では、60代以上の信徒が重視する手刺繍による教会刺繍制作について考察する上で、近代以降の手刺繍と機械刺繍の意味を今一度振り返りたい。そのことによって、60代以上の信徒が育んできた手芸文化の背景と、若年層の信徒が現在取り組んでいる手芸文化の背景の違いが明らかになり、教会刺繍を制作する上で見られる世代間における手仕事への「意識の差異」「意識のずれ」について考察することができるだろう。

19世紀に起きた社会的・経済的变化によって伝統的な刺繍と手織り絨毯は機械による製造に取って代わられるようになった。その結果女性たちは自らの刺繍技術と引き換えに機械刺繍が施された工場生産の衣服や布製品を安価に手に入れるようになっていった。1828年イギリスでジョゼフ・ハイルマンによって考案された機械は、手刺繍産業を衰退させ、世界各地で大規模な経済打撃を与えることとなった〔藤田 2009:19〕。

産業革命以後の社会について論じられるとき常に取り上げられる問題は、手と機械の違いについてであり、手と機械とは二項対立の概念を持って語られていた。それは、機械の画一化された運動の連続性に対して、必ず想起される手による労働には、機械の画一性に反するものとして、多様性が求められていたからである〔飯岡 1983:52〕。従って、産業革命以降製品の機械化が進められ、手と機械の役割が分断されることによって手仕事の最価値化が行なわれたのである。

しかしその手の最価値化は、女性が行なう手芸に関してはジェンダーの概念が重ね合わされ、家庭内での無償の手仕事に女性に従事させる役割を果たした。山崎によると、ヴィクトリア期に形成されたジェンダーによる性別役割分業とそれによる女性労働のシャドー・ワーク化がモリスの刺繍工房でも実践されていた〔山崎 2005:267-269〕という。ヴィクトリア時代

は、中産階級思想に定着・浸透した家庭重視（ドメスティック）イデオロギーが存在していたため、男性の公的領域での労働に対し、女性の私的領域内での家事などの無償労働の中に手仕事が位置づけられ、美德とされていた。モリスの刺繍工房でもデザインはモリスが担当し、その下で女性たちがそのデザインにそった刺繍制作に向かっており、デザインという「自由と創造」は男性に、手仕事に付随する「単調と反復」は女性に分離され、女性たちの単純労働成果が結果的に男性の作品として歴史に名を残すことになっていった[山崎 2005:267-269]。ここで山崎は、手仕事を、単純労働の比重が多い労苦を伴った行為であると捉えている。しかし、すでに小野も述べているように、デザインの「自由と創造」に対して手仕事の「単調と反復」という考え自体もまた、近代主義的な視点を持った概念なのである[小野 1992:136]。

ここで、女性信徒たちが手刺繍を重視する背景の説明として、ベンヤミンの手仕事についての一文を引用してみたい。彼は、物語を手仕事に捉えて、以下のように述べている。

「手仕事の一農民の、船員の、そして都市の職人たちの手仕事の一輪のなかで長く栄えている物語は、それ自体、伝達のいわば手仕事の形式なのである。物語は、情報や業務報告がするように、事柄を純粹に「それ自体」だけ伝えることを狙っているのではない。それは事柄を、いったん報告者の生のなかに深く沈め、その後再び底から取り出してくれる。そういうわけで物語には、丁度陶器の皿に陶工の手跡がついているように、語り手の痕跡がついている」(下線筆者加筆)[ベンヤミン 1996 :301]。

ベンヤミンが物語を手仕事にたとえたのは、そこには作り手一人一人の手跡がつくように、決して単純な「単調と反復」だけではない、手仕事の真髓があるからである。それは、日本聖公会の女性信徒たちが重視する、手刺繍による信仰とも一致している。自身の手で行なうからこそ、自身の信仰のあとがつくのであり、ひたすら手で刺繍を刺すという、その労苦と思われる行為こそが、自身の信仰を強めていくのである。

またさらに、1970年代以降修女に代わって家庭を持つ女性たちが教会

刺繍の作り手になると、手を用いる意味にさらに新たな意味が付与された。修女の自立目的で行なわれていた教会刺繍とはまた異なる、消費から乖離した場所に位置づけられた教会刺繍が誕生したのである。ここで初めて、先に述べた「見せない」「売らない」「美しさを求めない」という新たな3つの規定が、主婦層を中心とした女性信徒たちの共通の意識のもとに成立したのである。以上のことから、女性信徒たちが手刺繍によって教会刺繍を刺す行為の根底には、手刺繍によって自身の信仰を表すという働きを見ることができる。それに対し機械刺繍は画一化されたものなので、自身の信仰を表すことはできないと考えていることが想定される。

しかし現在、教会刺繍を取り巻く環境は、30～40年以上前に60代以上の専業主婦世代の女性信徒たちが共通の理念や意識を持ちながら教会刺繍制作に取り組んでいた時代とは異なり、変化をとげ、後継者不足による技術継承の危機という岐路にたっている。現在の後継者として期待される20代～40代の女性たちを取り巻く環境は、より複雑になった。そのため年齢層や置かれている社会的なステータスをカテゴリー化し、共通の意識を論じることは難しくなっている。現在は、信仰心もまた個人の中で育まれ、個人の価値観と共に深められていると言えよう。教会刺繍の制作に関しても、単純に機械と手という二項対立の概念が成り立たなくなっている。ある人にとっては、手のみを用いることが最も神聖であっても、ある人にとっては自分の身体と同化した機械を用いることは自分自身の延長に機械が存在することを意味しているため、信仰の軸から外れるという意識はないからである。

今日では、手芸は単に家庭内で行われる無償の労働の意味を越えて、自己表現やアート作品の範囲にまでその領域を拡大している。普段の生活で手芸にアートの感覚をもつようになった若年層の信徒にとっては、信仰と手芸が結びついた時そこには自己のアイデンティティを表象する一つの形態、すなわち自己表現としての教会刺繍の意味が生まれているのではないだろうか。現在の教会刺繍は、女性の家内領域においてジェンダーの役割として行われる手芸と、新しく現出した自己表現としての手芸という二つの眼差しが混在するなかにある。こうした二つの手芸観のずれが、教会刺

續の後継者不足を解決できない要因として考えられる。

おわりに

以上、日本聖公会で制作されている教会刺繍の制作に着目し、その後継者不足の理由を考察してきた。調査をするなかでもう一つ新たな状況がある。現代の消費社会において、一方で手作りがブームとなり、他方で修道院でつくられている手仕事製品が修道院を訪れた観光客や若い女性たちのあいだで人気となっていることである。近年、修道院巡りに関する書籍も商業出版されている〔丸山 2012〕〔柊, 早川 2013〕。その手引きに基づいて癒しやリラックス効果が求められ、宗教関連施設では修道女や信者によって手作りされているお菓子やスリッパ、メダイなどのいわゆる「修道院グッズ」が購入される例が増えている。キリスト教信者ではない人々がキリスト教の信仰と結びついたものに「聖なるもの」という新たな価値を見だし、それが商品の一つとして位置づけられてきているのである。こういった動きのなかで、現在日本では一般の消費者へ販売されていない聖公会の教会刺繍が、今後、信仰と手仕事とが組み合わせられた特別な価値を持つ商品として「修道院グッズ」にくみこまれる可能性はある。こうした教会刺繍の位置づけの変化については、今後の研究をとおしてさらに考察していきたいと考えている。

注

- (1) 聖公会の名称について触れておくと、英国教会はイギリスでのアングリカン・チャーチ (Anglican church) に相当する日本語訳で、聖公会は世界中にあるエписコパル・チャーチ (Episcopal church) にあたる日本語訳というのが、一つの解釈である。英国教会は、イギリス本土での教派を指し、聖公会はその英国教会が世界に広まっていく中で正式名称として用いられるようになったと言われている〔小池 1999:34-35〕。
- (2) 例えば、殉教者を表す赤の期節には聖霊を表す鳩が、白の期節にはイエス・キリストを表すユリがモチーフとしてよく用いられる。

参考文献

青木淳

1992 「繡仏一縫い込まれた庶民の信仰」『繊維製品消費学会誌』33(4):177-183。

飯岡正麻

1983 「手仕事の意味」『九州産業大学芸術学部研究報告・九州産業大学芸術学部デザイン学科』14:52-58。

大崎綾子

2009 「女子美術学校の刺繍教育 明治、大正期を中心に」『女子美術大学紀要』39:10-20。

小野二郎

1986 『ウィリアム・モリス研究』晶文社。

1992 『ウィリアム・モリス : ラディカル・デザインの思想』中央公論社。

北川規美子

2014 「ヒルダ・ミッション～女たちの働きとシスター・フッド～(二) ナザレ修女会とヒルダ・ミッションとエピファニー修女会」『キリスト教文化 2014 秋』,pp197-208、合同会社 かんよう出版。

久保村里正

2006 「生活における労働と造形行為 ウィリアム・モリスとジョン・ラスキンの生活デザイン考」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』(55):149-56。

桑山隆

2002 『礼拝と奉仕』聖公会出版。

2013 『美しい捧げもの』出版社不明。

小池 虔二

1999 『聖堂ウォッチング』日本聖公会大阪教区 GFS。

斉藤みち・山川保子

2012 『わたしたちの教会刺繍 オルター・リネン(聖布)について』日本聖公会大阪教区聖布ししゅう会 大阪教区 宣教部 礼拝・音楽委員会 聖布ししゅう会。

中川麻子

2012 「明治時代後期における「繡畫」の誕生と発展」『デザイン学研究』9(4):50-59。

中川麻子・田中淑江

2013 「明治時代的女子教育における刺繍について」『筑波学院大学紀要』8:51-57。

中西良雄

2011 「聖ヒルダ・ミッションの慈善事業（1）―聖慈堂病院と震災救援活動―」『人間発達学研究』2:13-21

2012 「聖ヒルダ・ミッションの慈善事業（2）―濃尾震災救援と孤児院事業―」『人間発達学研究』3:21-30。

奈良国立博物館監修

1964 『繡仏』角川書店。

西原廉田

2010 『聖公会が大切にしてきたもの』聖公会出版。

西村敬太郎編

n.d. 『日本聖公会の試練』（出版社不明）。

日本聖公会宣教協議実行委員会

2012 「2012 年日本聖公会宣教協議会報告書」日本聖公会宣教協議実行委員会。

濱崎 千鶴

1998 「カトリック祭服における刺繍史 A History of the Catholic Vestments Embroidery」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』（28）:179-188。

1999 「カトリック祭服における刺繍史（2）キリストの象徴である十字架・モノグラムを中心に」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』（29）:75-190。

2002 「カトリック祭服における刺繍史（3）世俗刺繍及び人々との関わりを中心に」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』（32）:93-105。

柊こずえ, 早川茉莉

2013 『修道院のお菓子と手仕事』大和書房。

藤田治彦

2009 『もっと知りたいウィリアム・モリスとアーツ & クラフト』東京美術。

フリーライター, A 著・訳者不明

1966 『新しい祭服 キリスト教芸術叢書 1』南窓社。

ベンヤミン, ヴァルター著・浅井健二郎編訳

1996 「物語作者 IX」『ベンヤミン・コレクション 2』筑摩書房 301-303。

松永伍一

1981 『聖性の鏡 イコン紀行』 平凡社。

松原史

2013 「近代「刺繍絵画」の誕生—近代の特徴と前近代からの系譜—」 アート・リサーチ 13: 3-15。

丸山久美

2012 『修道院のお菓子 スペイン修道女のレシピ』 地球丸。

山崎明子

2005 『近代日本の「手芸」とジェンダー』 世織書房。

吉田雅人

n.d. 「聖公会における祭服」: 1-8。

GENT, Barbara, & Sturgess, Betty.

1982 THE ALTAR GUILD BOOK. MOREHOUSE PUBLISHING

PARKER, Rozsika

2010 (1984) THE SUBVERSIVE STITCH, Embroidery and the Making of the Feminine. I.B. TAURIS.

STANILAND, Kay.

1991 MEDIEVAL CRAFTSMAN EMBROIDERERS. BRITISH MUSEUM PRESS.

SYNGE, Lanto.

2001, 2006 ART OF EMBROIDERY History of Style and Technique.
Antique Collectors Club Ltd.

1982 Antique Needle work. Blandford Press.

SCHOESER, Mary.

1998 The Watts Book of Embroidery English Church Embroidery 1833-1953.
Watts & Co Ltd.

雑誌・会報誌

1976 『ナザレ修女会 四十年のあゆみ』 1976年4月 ナザレ修女会。

1986 『ナザレ修女会だより 創立50周年特集』 1986年12月 ナザレ修女会。

- 1986 『ナザレ修女会だより 移転特集』1994年4月 ナザレ修女会。
 1996 『ナザレ修女会便り 創立60周年記念』ナザレ修女会。
 2006 『ナザレ修女会便り 創立70周年記念』ナザレ修女会。
 2011 『ナザレ修女会便り』2011年12月 ナザレ修女会。
 2012 『ナザレ修女会便り』2012年12月 ナザレ修女会。
 2013 「日本聖公会の合同問題が起こった頃のこと 講師:司祭浦地洪一郎師」京都教区宣教局 懇談会・公開講演会・講演録。
 2013 桃山教会信徒数統計資料。

辞典・事典

クラバーン, パメラ著・尾上恵美・田村義進訳

1978 『手芸百科事典』雄鶏社。

日本基督教協議会文書事業部 キリスト教大事典編集委員会

1988 改訂新版(1963初版)『キリスト教大事典』教文館。

ブリテン, ジュディ

1981 『手芸の百科 ヨーロッパの伝統技法のすべて』文化出版局。

文化出版局編

2004(1983)『最新きもの用語事典』文化出版局。

松村明監修・小学館『大辞泉』編集部編集

1995 『大辞泉』小学館。

CAULFIELD, S.F.A.

1972 Encyclopedia of Victorian Needlework [Dictionary of Needlework], Vol.1

A-L

DOVER PUBLICATIONS, INC.

DAVIES, J. G., ed.

1986 A New Dictionary of Liturgy and Worship. SCM PRESS LTD.

Web サイト

文化庁 宗教法人宗務行政 HP

<http://www.bunka.go.jp/shukyouhoujin/toukei/> (2014/12/08)

香蘭女学校公式サイト

<http://www.koran.ed.jp/education/history2.html>Pew Research Religion & Public Life Project (2015/11/25)

京都府伏見区

<http://www.city.kyoto.lg.jp/fushimi/page/0000013282.html> (2014/11/23)

日本聖公会管区事務所 HP

<http://www.nskk.org/province/seikoukai.html> (2016/02/06)

日本聖公会公式サイト

<http://www.nippon.anglican.org/province> (2014/11/20)

日本聖公会京都教区

<http://www.nskk.org/kyoto/kyoto/index.html> (2014/11/23)

日本聖公会統計資料表

2011 年 http://www.nippon.anglican.org/province/shiryo/tokei_11.pdf
(2014/12/08)

2012 年 http://www.nippon.anglican.org/province/shiryo/tokei_12.pdf
(2014/12/08)

2013 年度 http://www.nippon.anglican.org/province/shiryo/tokei_13.pdf
(2014/12/08)

Pew Research Religion & Public Life Project

<http://www.pewforum.org> (2013/11/16)